

# エル・ネット「オープンカレッジ」 News

## 平成13年度 エル・ネット「オープンカレッジ」 効果的な活用モデル

高等教育情報化推進協議会では、昨年度に引き続き、エル・ネット「オープンカレッジ」の効果的な活用についてのモデル事業を全国7地区に委嘱しています。今回は特に岡山県、鳥取県のモデル事業を中心にレポートします。他地区のモデル事業については、ホームページで詳しく紹介していく予定です。

- ◆モデル事業委嘱先 ○北海道網走市オホーツク文化交流センター ○青森県総合社会教育センター ○石川県立社会教育センター  
○岐阜県立図書館 ○岡山大学総務部総務課 ○鳥取県教育委員会生涯学習課 ○鳥根市町村コミュニティ・カレッジ協議会

### 県域を越えた サテライト講座

岡山県と鳥取県のモデル事業

今年度、岡山県と鳥取県のモデル事業として行われた講座の1つが、「地域の教育力 - 子どもの幸せと親の役割」岡山大学教育学部 山口茂嘉教授（1月31日実施）です。

この講義は、岡山県教育センター（VSAT局）で山口先生が行う講義の内容をライブで全国に放送。それと同時に、数キロ離れた岡山県生涯学習センターや県内の受信可能な24施設（公民館、図書館、学校など）でも受信し、各会場には合わせて約400名の受講生が集まりました。また県域を越えて、鳥取県教育研修センター（VSAT局）そのほか受信可能な3施設（国府中央公民館、まなびタウンとうはく、米子児童文化センター）でも受信し、合わせて約200名の受講生が集まりました。岡山県教育センターと岡山県生涯学習センターとはテレビ会議システムで、また岡山県教育センターと鳥取県教育研修センターとはどちらもVSAT局なので、衛星通信による双方向のやりとりが可能です。すなわち、これらの3つの会場がつながることによって、約750名の受講生が1つの教室にいるような臨場感のあふれる講義となり

ました。（図参照）

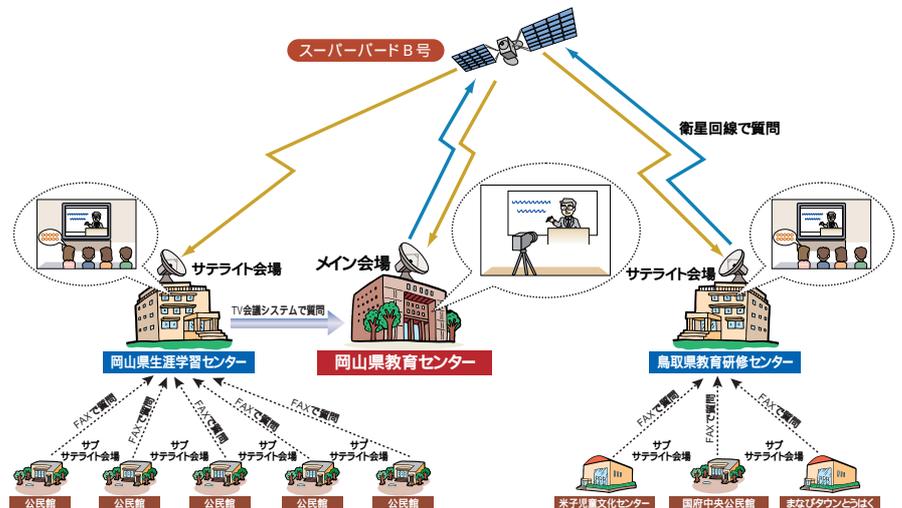
山口先生の1時間半の講義後には、テレビ会議や衛星のシステムを活用した双方向の質疑応答が約30分間行われました。岡山県の生涯学習センター以外の各施設からは、FAXでメイン会場の県教育センターに質問を送ることができます。また、鳥取県の教育研修センター以外の3施設からは教育研修センターへFAXを送ることになります。まさに、双方向性を活用したリアルタイムの質疑応答です。

このように、このモデル事業は、岡山大学の公開講座をエル・ネットで県内外に広域的に発信し、効率的な遠隔教育の実施方法を探ることを目的としています。講義をライブで送信し、双方向質疑を行い、しかも県境を越

えた各施設を結んで実施されたものとして注目されます。また、鳥取県では鳥取県民カレッジとの連携講座としても位置付けられています。このモデル事業によって、遠隔教育や各機関の連携方法、公開講座のあり方などについて、エル・ネット「オープンカレッジ」の多様な活用の仕方が見出されるものと考えられます。



図・双方向通信システム



## 岡山大学講座 「地域の教育力」

テーマ

「子どもの幸せと親の役割」  
(山口茂嘉教授) を聴く！



ここでは、遠隔双方向講座として岡山と鳥取を結んで行われた「子どもの幸せと親の役割」の講義の様相をレポートします。

山口先生は、岡山大学附属幼稚園の園長を兼ねておられます。そのため園児の保護者に講演をされる機会も多いとのこと。先生が話される岡山県教育センター会場には150人のお母さん方が集まりました。

エル・ネットによる遠隔講義は、受講生同士が隣の人とあいさつをしながら握手をするところから始まりました。これで会場に笑い声が生まれ、雰囲気も和やかになります。先生は、このような人と人が触れ合うことを大切に考えておられます。

「子どもたちと触れ合う時の大人の役割として、どんな理屈よりも一番大切なのは『人生の先輩として一緒に居ると安心ができる』ということです。子どもは親をはじめ、幼稚園や学校などで多くの大人たちと出会い、たくさんの思いに支えられて、一步一步自分の人生を歩んでいける。その出会いは人生そのものです。なにげない一日の色々な形の出会いが大切ですが、現代は忙しさの中で『触れる』こと、『心が通い合う』ことが少なくなっている時代なのではないでしょうか。あなたは今朝、

きちんとご主人を見送られましたか？」

先生の研究対象は、当初は青年心理でしたが、研究を進めるにしたがって徐々に対象年齢が下がっていかれたそうです。その中で、生き生きしている子どもたちが、年齢が上がるに従ってやる気を失い、何事にもなげやりになってしまう姿が、残念に思われるようになったということです。そこには、やはり父母や家庭の問題があるようです。

先生は、人間の類型として、もえている人(人生の目的をしっかり持って、学びなどが統合している人)、くすぶっている人(心の中が穏やかではなく、いつもいらいらしていて非行に走ってしまう人)、きえている人(無気力・無行の人)の3タイプをあげます。どのタイプになるかは、子どもを取り巻く親をはじめとした大人たちの問題が大きくかわってくる、ということです。

「スマレとかあちゃん」という小学校3年生の作文が紹介されました。

「寒い日の学校帰りに、子どもが道端でスマレを見つけます。喜んでそれを持ち帰り、大好きなお母さんに見せようとしたところ、お母さんに『スマレくらいで、大きな声を出すな。』と言われてしまいます。『僕、なんにもする気がなくなった。』という言葉で作文は終わっています。お母さんはこの時、子どもの心に響いてあげる心の余裕がなかったのでしょうか。親子関係に限らず人間関係の中では、心が響き合った時に人間は生き生きし、燃えることができます。しかし、日常の忙しさの中で、子どもの心を受け止める余裕がなくなり、このようなことが積み重なっているのではないのでしょうか。」

「子どもは、育っていく時に2つの願いを持っています。すなわち、親への『依存の願い』と『自立の願い』です。その間を行ったり帰ったりしながら、少しずつ子どもは自立していきます。子育てというのは、子どもの発達を考えながら、その行ったり来たりを上手にさせてあげることなのです。」

では、具体的に「親とすることができること」は何でしょうか。テキストには「子どもの興味を生かし、意欲や自主性を育てる親

(保護者)の働きかけ」の図があり、そのエッセンスが凝縮されています。例えば、「子どもの言動を良く観、良く聴く」「子どもの成功感を認め、共に喜び適切な助言を与える」など。知っているのと知らないのとでは、子どもへの対応が全然違ってきます。「子どものため」を思わない親はいませんが、親がどういう心がけで行動しているのか、長い目で見てどうということにつながっているのか、それが何のためなのか、が子どもの幸せに大きく影響してきます。

では、改めて「幸せ」とはどのようなことなのでしょう。先生は、アドラーの「幸せの3つの条件」をもとに、家庭教育や親・大人の生き方を考えていきました。それは自己受容、他者信頼、貢献度、です。そして、そのためにも「学ぶ」ということが大切になってくるのです。

「今、学校教育の一番の問題は、不登校でもいじめでもありません。子どもたちが『学ぶ』ということから逃げている、そこに意味を見出せてなくなっていることこそが、緊急の課題です。何のために学ぶのか、考えてみてください。また、都市化や核家族化の中で、地域や家族で『助け合う』ことが少なくなってきました。大人の私たち一人一人が幸せの条件を生きること。そして、親は子どもに対して、聴き上手、頼み上手、認め上手になり、その繰り返しの中で幸せの3つの条件を育み、人生で大切なことを伝えていく必要があります。」

先生は、具体的な事例や子どもの作文、漫画、含蓄のある昔話、逸話などを要所要所に織り交ぜながら、とてもわかりやすくお話下さいました。最後に紹介されたマザー・テレサのメッセージ「向かい合う8つの目」も、現代の家庭のあり方について、非常に考えさせられました。



## 山口茂嘉教授に Q&A

1時間半の講義が終わり、休憩を挟んで質疑応答の時間です。

鳥取会場からの質問「スマレの作文の例は良くわかりましたが、母親も自分自身が悩みを抱えていたりすると、つい子どもの心に響いてあげることができない対応をしてしまうことがあります。母親も努力しているが、それでも不適切な対応をしてしまった時、その後の行動は、どのようにしたらよいのでしょうか？」

山口先生の回答「まず『やってしまった』ことに気づくことが第一歩です。多くの場合、それに気づかずに、そのパターンを繰り返し、子どもがどんどん心を閉ざしていってしまいます。お母さんは、一方的に言うだけ、言ってもわかってくれない、ということになってしまいます。このような講座や学習会で、『自分のかかわり方のここが問題なのだ』ということに気づくことが第一歩です。その次に、自分に正直にな

って謝る。『ごめんね、このあいだお母さんいそがしくて、ちゃんと聞いてあげられなかったね。今度は聞いてあげるからね』って謝ることで、子どもは新しく経験したことを誰かに話すことで、頭の中が整理できたり復習になったりする。ぜひ、聴き上手のお母さんになるように心がけてください。」

岡山会場からの質問「祖父の立場から、孫に親世代を飛び越えて、どこまで携わったらよいのでしょうか？」

山口先生の回答「一緒に生活する中で、親世代しかできないかわり、祖父母しかできないかわりがあると、思います。親世代とは価値観が違っているが、だからこそ話し合うことが必要です。長く生活した中での色々な経験を、孫と親世代に同時に話し共通理解を得ていく。そうすれば、子どももさまざまな考え方があることを理解し、『では自分はどう考えて、どう生きていくか』を身に付けていくでしょう。」

このほかにも、サブサテライトの会場からの質問など、30分間の質疑応答でしたが、全部で6つの質問と応答がくりかえされました。

収録後、山口先生にお話しを聞くことができました。今回の双方向質疑の試みについては「限られた時間での質疑でしたので、こちらも緊張いたしました。」エル・ネットについては「鳥取会場との質疑の時間が少しずれるのを見ると、衛星まで往復しているのだと実感しました。今の時代の試みを有効に使って、情報が行き交うことによって、一方向だけでなく、お互いに対話することがますます重要になってくるでしょう」と話されておられました。

また、岡山県教育センターで受講されたお母さん方の感想には、「新しい試みでいろいろな所から生の質問も聞けて、その場で答えを聞くことが出来るので、私たちも質問をしてみたいと思います。」「はじめて、このような場に参加したのですが、みなさんいろいろな考えを持たれていることがわかりました。」と、双方向性に対する評価が高いことが伺えました。（五十嵐牧子）

## 市民による公開講座 運営の可能性

北海道網走市  
オホーツク・文化交流センター

北海道網走市では、エル・ネット受信局のオホーツク・文化交流センターがサポートする市民団体「あばしりまなび塾」により実施委員会を

組織しました。札幌学院大学講座「北の文化 考古学と言語学から」のうち「考古学の方法」「石器と土器からみた北海道の先史時代」（講師：鶴丸俊明助教授）を受講しました。収録時には、収録場所の札幌会場と受講者のいる網走会場をテレビ会議システムで結んで受講（9/18・25）。また別の受講グループでは同じ講義をエル・ネット放送時により受講（10/4・18）。最後に、網走出身の鶴丸先生をお招きしての最終講義（10/18）が行われました。市民の自

主的な活動としてエル・ネット「オープンカレッジ」を活用した公開講座を運営することができました。



## サテライト講座の面的 広がり 番組配信の地域連携の 在り方を求めて

青森県  
総合社会教育センター

青森県総合社会教育センターでは、昨年引き続き淑徳短期大学とテレビ会議システムを活用した双方向講座を実施しました。昨年との違いは、総合社会教育センターの他、五所川原市中央公民館、弘前市総合学習センター、

十和田市東公民館、むつ市立図書館、青森県立南郷高等学校の5会場が、交代でテレビ会議システムを利用するメインサテライト会場となることで、FAXによる質疑ではなく、東京にいる講師に直接質疑をする機会が増え、参加意識をより高めることができたこと（11/27、11/29、12/1、12/4）。また、今年度は弘前大学講座3講義（放送12/14・15）、八戸大学講座4講義（放送10/19・20）を総合社会教育センターの視聴覚ライブラリー部門が収録し、総合学校教育センター（VSAT局）から放送しました。これらの講座は青森県総合社会教育センターが実施する「あ



おもり学講座」の中に位置づけて実施されました。エル・ネットを活用した地域発信の在り方についてひとつのモデルを示すことができました。

## 県独自の番組発信を 目指して

石川県  
県立社会教育センター

石川県では、生涯学習プログラム石川県民大学校大学院「石川の博士」自主講座に、中部大学講座「異文化コミュニケーション」(小中陽太郎教授)を活用したモデル事業を展開し

ました。事前に「オープンカレッジ」の番組で中部大学講座を視聴(8/30、9/6)した後、講師の小中先生を招き、県立社会教育センターをメイン会場に、寺井町立図書館と田鶴浜町サンビーム日和ヶ丘の2つのサテライト会場をテレビ会議システムで結んでライブ講義と双方向質疑を行いました(9/7)。この講義の様子を録画し、後日(10/25)、県教育センター(VSAT局)から石川県特別番組としてエル・ネットで放送しました。視聴覚ライブラリー部門を持つ県立社会教育センターが中心となっ

て、大学との連携、県教育センター(VSAT局)との連携により、いしかわ独自の番組発信が行われました。



## 社会教育施設のIT 講習を補完する

岐阜県図書館

岐阜県図書館では、図書館が実施するIT講習とエル・ネット「オープンカレッジ」の番組を組み合わせた活用方法にとり組みました。IT講習の終了後、ホームページを作成

してみようということで、中央学院大学講座「ホームページ作成入門」(高橋律専任講師)を録画利用しました。視聴後、職員が実習をサポートして、実際にホームページの作成にとり組みました(1/9、1/16、1/30)。正規のIT講習は25名が参加しましたが、希望参加ということで、10名の方がエル・ネットによる講座に参加されました。このほかに岐阜大学講座「思春期の子どもの問題行動の悩みをかかえる親のために」を取り上げ、両講座について、広報活動、講師より関連文献の紹介を受け準備、

講座の録画を行い、図書館資料として受け入れ、閲覧受講できるようにしました。また受講者の質問をとりまとめ、Eメールや掲示板で講師に送付しました。



## 学習メニュー方式を 8施設で実施

島根市町村  
コミュニティ・カレッジ協議会

島根市町村コミュニティ・カレッジ協議会では、昨年の5地区から8地区に受信施設を増やし、それらの施設と連携して、講座選択方式によ

る事業を展開しました(2001/12/4~2002/1/27)。取り上げた講座は、28大学66講座70講義。講義数にして約半数を取り上げました。各受講者は10講座以上の受講を目標とし、必修とする島根大学講座(3講義)では、各回講義視聴後、インターネットテレビ会議システム等を使って、質疑応答を行いました。また、オープンカレッジ受講料の徴収のあり方や、簡易印刷機を使ったテキストの配布方法についての実証的に調査を行ないました。



## ◆平成14年度放送は5月7日から開始の予定です◆

平成13年度の放送は、2月28日で終了いたします。

平成14年度のエル・ネット「オープンカレッジ」は、5月7日から放送を開始の予定です。

5月から8月までは、これまで提供された講座の中から好評だったものを再放送します。

なお、再放送期間中は、毎週火曜日・木曜日・金曜日の午前中と、土曜日の午後2に2チャンネルで放送します。

文部科学省 エル・ネットのホームページ

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shougai/elnet/](http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/elnet/)

エル・ネット「オープンカレッジ」ホームページ

<http://www.opencol.gr.jp/>